

術語としての「国字」

笹原宏之

一、はじめに

漢字は、中国では殷代以前から生じ、紀元前後には日本にも伝わったとされる。しかし、「漢(漢)字」の語自体は新しく、中国においては元代までに、日本においては鎌倉時代頃に現れるようである。⁽¹⁾これに対する語としての、「國書」・「國語」等の語に基づく「國字」は、中国では元代のバスの文字等、非漢民族の新たな文字を指す語として現れる。

日本に漢字が伝わると、中国の漢字をほぼそのまま使用する以外に、さまざまな日本化が起こるようになる。平仮名、片仮名等のほか、字体では日本製異体字(中国製と暗合もありうる)、書風では和様、字音では和音(訛音)・類推音・慣用音、字義では国訓(「佚存」義・偶合・転化・宛て読み等の可能性を否定する証明は不可能で、和漢の古今の事物・概念・ことは自体のずれには証明不能な点もあり、造字としての資料価値は低い)、字の用法・配列

法では和臭等がある。

漢字に倣って日本の人が作った字(造字)は、奈良時代以前より存するようだが、それらに特別な名称が与えられるのは、かなり後のことである。

日本では、「國(国)字」の文字列をいくとおりかに読むが、「こくじ」と読む場合に限っても、歴史的に見ると江戸時代以来、①ある国における使用文字(公用・通用の別もある)

(1)同全体

(2)同一部

②日本における使用文字(改良新文字等も含む。とくに漢字)

(1)同全体

(2)同一部

③仮名(平仮名・片仮名)

(1)同全体

(2)同一部

④日本における造字とおぼしき漢字の類

(1)同全体

(2)同一部

⑤いわゆる「神代文字」

(1)同全体

(2)同一部

(3)各種の総称

等の意味がある。ここでは、④の「国字」について考察していく。「倭字」・「和字」は、後述のようにより古くから用いられ、個々の日本的用字法・日本的表記法等をも意味するように、より広い概念を有するに至った。

④の「国字」の意味内容も、細かに見ると、時代により、人により、時には場面により異なることがある。このように国字という実態のなお不明確なものを取り出して扱うことの意義は、例えば和製英語や和製漢語、地域造語法等の研究に比することもできよう。ここで国字に問題点を限定する理由の一つは、国語学の論文・辞書類・概論書等や、一般の書籍における国字の説明に、不足、それによる誤解、矛盾等のあるものがままあるためであり、一度全体を把握し、見直す点を明らかにする必要もあるうと考えたためである。

国字は、それが日本製漢字であるとなると、字源的観点(主として解釈・規範的。「会意」と簡単に処理されている文字の分析を徹底することも必要)から見ると、製作された時点では漢籍に

同一の根拠がない新造字、いわば「俗字」・「和臭(習)」の最たるものの一種としての意識があるであらう。が、継続的使用・変化的観点(主として観察・記述的。学術性、芸術性、実用性等が混在してきたことが分かる)から見ると、音韻変化ほどの規則性、体系性はないようだが、どの時代に使用者・読者にその意識が残っているか、出自についての認識があるか、または単に漢字の一つとして意識されていたか、位相による違いはどの程度証明できるか等、後の経過を追うことの意義が問われよう。それらは同時代的な発言の真相の確認、使用の多少・有無等により、ある程度跡付けうるものである。

日本人によって作られた文字がいかに日本での用字として使用を蓄積していき、日本語表記の中に溶け込み、容認されていき、公認までされるか、またすぐに消え去ったか等の事象やその背景を明確にしていくこと、語誌と並行する「字誌」の存在価値(頻出語・頻出用字、造字、語の変化・新出・新造字、新たな字義・字訓等の発生といった現象があり、文字の研究にはことばとの関わりを無視することはできない)等を考えるに、やはり意味のないことではないように思われる。このようにしていくと、漢字全般にわたる、表記全体に及ぶ一般論の一つとして応用することができるようになるか否かが課題となる。

本稿では、国語学における国字研究という分野が確立していく江戸時代における資料・研究資料の類に限定して、遊戯文字等を除く④の日本製漢字と考えられた文字に対する用語・術語の歴史

を振り返り、筆者の術語の選択と概念規定の明確化を図る。江戸時代以前にも関係する事項は少なからず存したので、参考程度に記しておく。

用語・術語の歴史的な変化を把握することは、国字の研究史のみならず、使用の歴史、両者の間に位置する使用者・読者の字源解釈・由来等に関する知識・価値観等の意識の歴史——これらには、地域・位相等による差異も存する可能性がある——を考察する上でも意味があることである。

二、江戸時代に行われた用語・術語の概観

(1) 「作字」類

④の意味に近いものとしては、院政期頃から鎌倉時代初期の『江談抄』⁽²⁾、室町時代の抄物等から存する「(本朝)作字」・「作字」がある。これは、「さくじ」・「つくりじ」の語として江戸時代には俳諧・辞書・随筆・字書・注釈書・研究書等にしばしば用いられた。「造り字」⁽³⁾等其他の表記や、まったく別の意味もある。また、中国で新たに作った文字の類をも指すことが多く、④を含めたやや広い概念・用語としてとらえられる。「作(り)く」の語には、否定的な意識を読み取ることもできそうである。

(2) 「倭字」・「和字」

④の意味に近いものとしては、『下學集』・『節用集』⁽⁴⁾諸本・『いろは字』⁽⁶⁾等、室町時代頃から存するが、意味内容はより広く、国字という日本製漢字に、国訓等の日本的用字法と見られるものを

含めて総称しようとするものである。これも④を包含する広い概念・用語といえる。「和」注記自体は平安時代頃より存し、その影響もありうる。

江戸時代を通じて辞書・事典・随筆・字書・雑俳・研究書・注釈書・俳諧等、最も多く用いられた用語である。『和漢三才圖會』⁽⁷⁾には「倭字」・「和字」をともに用いている。『下學集』等、室町時代以降は「日本字」⁽⁸⁾の語も用いられているが、これも④よりも広い意味である。

(3) 新用語の一つ「倭俗制字」・「本邦所制之字」——国字・国訓の区別の明確化

国字を国訓等とともに「俗」の一つとしてとらえることは『和名類聚抄』⁽⁸⁾等に見られるように少なくとも平安時代には存し、後に影を落としている。中国の「俗字」等の語が背景に考えられる。江戸時代の『和爾雅』は「和字」・「偽字」(価値判断を含む。国字専門用語ではない)とともに③の二つの語句を用いる。本書では国訓に当たるものを「倭俗誤訓義二字」として区別したが、基準の不徹底、判断の誤りも見られる。『續和漢名數』⁽¹⁰⁾の「倭俗制字」・「倭字」と「日本誤訓字」との区別も注目されるが、内容は前書とほぼ同じである。

(4) 新用語の一つ「國字」——術語の出現

新井白石(後述)の『同文通考』⁽¹¹⁾やその先行稿本・写本数種には、「漢字」の語に対する「國字」の語が明確に示され、用いられる。ただ、基準と実際の個々の例字との間にはくいちがいもある。

る。なお『東雅』⁽¹²⁾には「鯨」・「鳥」を「俗字」かとする記述がある。ほか国字の説明は散見されるが、とくに国字専用の用語はない。

(5)その他の新用語等

『齊東俗談』⁽¹³⁾の「造用字」⁽¹³⁾は国訓の類を含む。これは説明的な語句であるが、『異體字辨』⁽¹⁴⁾の「和俗字」はいっそう用語らしくなる。ただし、意味内容は同様である。『和字正鑑鈔』⁽¹⁵⁾の「此國にて作れる字」等も国訓を含める。『書言字考節用集』の「本朝俗字」⁽¹⁶⁾は、「本字」でないとする文字「籒」・「籒」(偏旁等付加(添加)字)等との区別を試みる。『和字正俗通』⁽¹⁷⁾は、「和制一」・「借字一」・「誤義訓」・「妄制」・「誤態」等、国字と国訓との区別のほかにさらに細かい分類を行うが、その細部には疑問が残る点が多い。朝鮮の造字を「韓字」と呼ぶ箇所もあることが注目される。

『正楷錄』⁽¹⁸⁾は「倭楷」(省文を含む)と「倭語」(国訓の類)と「倭俗訛字」(日本製異体字・誤字の類)。「倭楷正譌」の「倭俗楷字訛」に似る)とを分ける。『自然眞營道』⁽¹⁹⁾には「制字」等が漢字・自らの造字・改造字にも用いられる。そのほかの例を列挙しておく。『音訓國字格』⁽²⁰⁾「日本之文字」、『俗書正譌』⁽²¹⁾「俗の作り字」・「俗製の字」・「和の製字」⁽²²⁾・「和製字」⁽²³⁾、『西説醫範提綱釋義』⁽²⁴⁾「新製字」(個人文字)、『燕石雜志』⁽²⁵⁾「和製」(合字の類)、『國字考』⁽²⁶⁾「此國にて作れる俗字」・「俗のつくり字」、『倭名類聚鈔箋注』⁽²⁷⁾(箋注部分)「皇國諸聲字」・「皇國所製(所造)會意字」・「皇國會意字」・「皇國製字」・「二合字」・「製字(作字)原自異字」(国訓)、『俚言集覽』⁽²⁸⁾「俗の造字」、『都會節用百家通』⁽²⁹⁾「和俗制作の字」⁽³⁰⁾。

『萬葉集古義』⁽³¹⁾「異字」の一つ「増畫」(異体字とも重なる概念)、『皇朝造字攷』⁽³²⁾「皇國造字」でない佚存文字・「皇國古人造字」・「皇國古人會意字」⁽³³⁾、『奇字抄錄』⁽³⁴⁾「皇朝ノ作字」・「皇國俗間ノ偽字」・「日本ノ俗字」・「皇國ノ俗字」⁽³⁵⁾、『倭字攷』⁽³⁶⁾「皇國會意之字」(以上、国字専門の用語ではないもの、説明的な表現、他書からの引用語句と見られる例も若干含むが、間接的に国字をも表す語句、前掲書の単なる継承にすぎないもの、存疑例等は多く省略)等があり、紙幅の都合等で挙げない例もなお多く、かつ筆者の未見のものもなおある。

これらの語の使い分けは各人・各書とも、意識的にも、運用的にも必ずしも徹底していない。一書中でいくつかの用語を用いるもの、さらにその区別を試みたもの、とくに国字と国訓との区別を行おうとするものが多いが、ほとんどが概念規定・判断基準が曖昧で、その運用も的確に行われていないことが多く、全般になお不徹底である。

参考「新在家文字」——位相文字についての用語の出現⁽²⁷⁾

細井廣澤「觀驚百譚」⁽²⁸⁾には「和朝の俗字」の一種として「新在家文字」⁽²⁹⁾を挙げている。これは位相文字で、複数の主として用字であるが、「世話字」・「隱書」等と同様、やはり④よりも意味が広い。「抄物書」についての用語はより古い。「橋菴漫筆」⁽³⁰⁾等は「新在家文字」を「俗字」⁽³¹⁾でないとする。他のいくつかの用語も諸書に見られるが、ここには略す。

以上の用語を意味内容により分類してみると、単に製作した文字という意味系、俗の製作した文字という意味系、日本製の文字という意味系、日本製の俗字という意味系、個々の字の字源についての説明系、誤字視の表明系、個々の字の位相についての説明系、その他、に含まれる。

三、国字の内容

「国字」は、厳密には、日本人が漢字に倣って作製した文字のみを指すものである。しかし、今日までに「国字」といわれたも

例字	体	形	音	(一訓式)	義	用法	判断される名称
鳥	漢	漢	漢	漢	漢	漢	漢字
詰	漢	漢	漢	漢	和漢	和漢	漢字 国訓も使用
偲	漢	漢	漢	和	和	和	漢字 国訓が多用
枉	漢	漢	漢	和	和	和	漢字 国訓のみ
俣	漢	和	漢	和	和	和	国字
働	和	和	和	和	和	和	国字

のについて、例えば和漢の文字を再検討し比較すること等により、日本の用字を上の方のようにして考えてみる。

単字(一字)に限定して考える(例、「俣」の、中国製ながら後の字書に載らない異体字としての、また、その簡体字としての「俣」は、「俣」に由来するらしい「俣」とはいちおう別の文字と扱う)。これでも「迎」、「嵐」、「掟」、「鞋」、安藤昌益の「涸」(ウヅ)のように不明例もなお存する。「働」は中国等へも伝播したが、そのことは今は考えない。

現実には、この表のように一字ずつ示していくなどの作業をすると、純然たる日本製漢字と判断しうる文字の他に、

a 佚存文字(可能性が高いものを含む。以下同)

元来は漢字(転用等をおこなっているものもありうる)

b 漢字の日本的異体字にすぎない字

日本化字体漢字(改造・会意化とみられるものもある。以下仮称)

下仮称)

c 漢字の日本的異体字が音訓上も日本化した字

日本化字体日本化音訓漢字

d 漢字の日本的異体字が意味上も日本化した字

日本化字体日本化字義漢字

e 漢字の日本的異体字が用法上も日本化した字(dと重なりうる)

日本化字体日本化用法漢字

f 日本製漢字だが偶然既に別の同字体の漢字が存していた字

字体等暗合漢字・国字

いわゆる「国訓」の一種だが、日本化音訓漢字・日本化字義・用法漢字（積極的な宛て読み、俗解、転用、誤用、記憶違いによる誤解等が原因）とは発生・由来が異なる。単なる佚存義や、佚存義と日本での意味との偶合もありうる。国訓、国訓だが造字と筆録者に自称されたものにも、宛て読み、用字法の問題等である可能性がある。

g 漢字（中国古来の漢字・中国の新漢字・中国の俗字（新旧ともにある）・中国の地域文字（新造字が多い）・中国の位相文字）・朝鮮の国字等に対する無知等による誤解

対中輸出国字、対朝・韓輸出国字との区別は必要。

日本での独特の変化・中国以上の広まり自体は注目される現象である。日本での造字・改造（異体字よりも積極的・特殊）があつたと考えられるものもある。

h 符号・符丁・しるし・神代文字の類の一部

i 中国人・朝鮮・韓国人が日本の固有名詞等の字形を誤伝したもの
j 仮名合字

k 漢字字体を改造したローマ字・仮名声符略字

等が、先の④の国字の中に混在しているようである。以上の中には、個々の字では、漢字本来の音義等との併用例と、国訓専用例とがある。国訓や、純粹の古来の漢字、その異体字等であることとを知らず、国字と誤認するものさえもある。

なお、書体レベル（「誤った帰属」に類似性のある現象もあり）、書風レベルの諸事象、符号化、臨時的・一回的な偏旁等付加（「語

の治療」に類似性あり）、字体上の同化等については、これらに準ずるもの、関わるものがあるともいえるが、ここでは多く省く。

四、白石の「国字」

白石による国字の明確な定義づけ・概念規定・術語化は、発想・内容ともに『和爾雅』等の先行文献に拠ったものである。ともあれ、日本で最初の整備された国字の研究成果として認識されてきたものであり、後への影響も次第に多大となる。例えば、国字に魚名を表す字種が最も多いという誤解を生む遠因とも見られるので、ここにとくに取り上げることとする。『同文通考』(11) 卷四には、「国字」について、

(a) 「本朝ニテ造レル。」——日本の作という面

(b) 「異朝ノ字書ニ見ヘヌ」——同時代までの漢籍にないという面
（「俗閑所^レ用亦^レ有^二漢人字書所^レ不^レ載者^一」とも）

(c) 「其訓ノミアリテ。其音ナシ。」——字音がないという面の三つの異なる次元の判断が含まれる。

(a) によると「桮」(キミザ)「椀」(ヤミザ)はここでは「樺」の異体字ではないようなので問題としない)・「榎」(ミサ)「説」(音カ)・「餅」(アキ)「鵠」(チトリ)「鴈」(ヤトリ)との関連も問題。「衡」は「國訓」の「訛字」か)等のfの「國訓」らしきものが混入し、自ら扱いに疑問を示す「鰯」(イカルカ)・「樺」(タスヤ)・「皇」等の佚存文字らしいaが排除されるはずである。また、「鉢」等字源が不明確なものの収録にも問題が生じてこよう。「國訓」と扱ういくつかもここに入るべきものがある。

とが多く、中国と日本の現存資料同士の比較による推測にとどまらざるをえない。由来が証明できない古い文字である以上、実証は難しいが、文字の用法上の問題である国訓は、第一義的には文字の作製上の問題である国字とは別のものとして扱わなければならない。転用等の漢字の使い方の問題である可能性を含む由来の判然としないものについては、今日なしうる考証により区別し、「国訓扱い」として多くの研究者のごとく造字の研究対象からいちおう除外するのである。客観的に由来を明らかにしえない以上、結果的に見て疑問の残るものはそのように処理しなくてはなるまい。そのために、次元の異なる国字・国訓という区別を白石はしたのであるうし、筆者も現段階ではそれに従う。

史実としては日本人が本主に作った漢字であっても、そうそれごとくしても、記憶の底に漢字が存して作ったつもりでいても、その事実を証明したい文字は、やはり国訓扱いされるが、日本での独特の使用例・収録例が中国での現存使用例・収録例よりも古いようであれば、日本で独自に作ったとの可能性が高いため、十分参考となる。またそれ以外でも、造字の参考とすることは可能である。

また、本主に日本人が独自に新たに造字したものであっても、中国に同字体の文字がすでにいると、例えば学術発表の先後、発明・新案の特許・登録申請の順序による判断のように、マイナスの評価が加わり、二番煎じとみなすことがなされることもある。ただ、音声言語を例にとると、固有語等すでに存する語形・音連

鎖と、新たに入ってきた外来語・漢語や、新たにできた言葉が同音であるからといって、同形衝突を起こすことはそう多くなく、また、それらの新しい語の方を二番煎じとはいいたくない。オリジナリティーを意識するか否かという点では、パラレルに考えられることの多い音韻と字体との間に、意識上の差の一つが現れているように考えられる（外来音の場合はまた別である）。

五、術語「国字」の内容

上記のことを踏まえて結論をいうと、筆者は、原則として「国字」の用語・術語を、日本人が作った漢字風の文字と考えるものに使う。「国」といえば、諸国で自国のことを、日本では日本国のことを指すというのは、いささか狭い感じもするが、「国語」・「国書」・「国風」等の慣用例も根強くあり、また「漢字」（ここでは中国製―渡来人・帰化人等の問題もあるが―の文字に限定）に対する語として歴史があるものであり、明治時代以降は新たな造語も行われるが、『国語学辞典』、『国語学研究事典』、『日本国語辞典』の「国字」の項をはじめ、近年の諸研究者の種々の論著で使用もほぼ習慣化しているためである。³⁹「倭字」・「和字」は、より古い歴史を有し、漢字にたい対する呼称としては適切であるが、訓読み例も多く、また「わじ」と読む場合に限っても「国字」同様に多義語であり、現在までの趨勢を見るに、④の意味で用いられる機会は相対的に少なくなっているのが実状のようである。b・eについては、字体という文字の基本的性質・存在に関わ

るものであり、積極的・有意的な改造、無意識的・結果的な変化・誤字とみなしうる場合として参考になることもある。よって、それらの中で顕著なものは従来の基準に照らし合わせて、参考までに「国字」に含ませうることとし、かつ「国」がどこを指すのか等が明確でなくてはならないので、「国字」（日本製漢字の類）のように表示することとする。それらを筆者の今後の研究対象に据えることとし、順次性格を見極め、省くべきものは省いていき、加えるべきものは加えていくこととする。白石には理論的に区分した基準と、現実の個々の字の性質とが一致していない場合がある。そこには、処理上の不注意、漢字全体に対する知識の不足、使用した字書の制約等が考えられ、その点は改めていなくてはならない。

「俗字」を研究する以上、研究史や字源の探求のみならず、字の実際に使われてきた経過・展開や、作り手・使い手・受け取り手等の意識・認識をできうる限り数多く、客観的に採集、調査し記述していくことがまず重要である。以上のことを踏まえて、従来の「国字」の概念に該当しうる文字を収集し、分析していく。⁽³¹⁾そこには、各時代の国字意識・国字観というべきものをも見出だしていくことができ、ひいては、用字・表記史の一面を説き明かしていくことにもなる。

注(1) 『日本国語大辞典』・『大漢和辞典』・『漢語大辞典』・『小學攷』等参照。「漢字」にも中国周辺非漢民族・諸国のそれに倣った造字を含める称（広義）と、非漢民族・諸国の

造字を含めない称（狭義）とがある。「文字」というと、世界の文字が対象となりうる。「中国系文字」というと、四川の古代文字、「蘇州碼字」、壮族の文字、ロロ文字等のような文字も含まれうる。

(2) 一九二五年醍醐寺三宝院藏写本影印本、一九八三年江談抄研究会編『類聚本系江談証注解』等。

(3) 一九七一年中田祝夫氏編『毛詩抄』（抄物大系）版本影印本、早稲田大学図書館蔵版本『御成敗式目諺解』等。

(4) 一九六七七年山田忠雄氏編元和三年版（古辭書叢刊）影印本。影印各種、一九八三年エツコ・オバタ・ライマン氏「節用集」における国字（日本製漢字）『モラロジー研究』一

四（収録していない箇所もある）等参照。

(6) 一九七四年鈴木博氏編『妙本寺藏永祿二年いろは字影印・解説・索引』等参照。

(7) 一九七〇年樋口秀雄氏編正徳五年跋版本東京美術影印本。

(8) 一九七三年馬淵和夫氏編『和名類聚抄古写本声点本文および索引』所収影印各本等。

(9) 早稲田大学図書館蔵元禄七年版本。「凡例」、巻八。

(10) 早稲田大学図書館蔵元禄八年版本。中巻。

(11) 一九七三〜七五年杉本つとむ氏編『異体字研究資料集成』所収影印本。

(12) 内閣文庫蔵自筆稿本。

(13) 早稲田大学図書館蔵貞享二年版本。

(14) 早稲田大学図書館蔵元禄八年版本。巻三。

(15) 一九七三年中田祝夫氏ら編『書言字考節用集研究並びに索引』所収享保二年版本影印本。

(16) 一九八二年安藤昌益研究会編『安藤昌益全集』所収自筆

稿本影印本。

(17) 早稲田大学図書館蔵文政八年版本。

(18) 早稲田大学図書館蔵文化二年版本。「題言」。

(19) 早稲田大学図書館蔵文化八年版本。

(20) 内閣文庫蔵自筆稿本等。

(21) 国会図書館蔵写本等。

(22) 早稲田大学図書館蔵天保七年版本。

(23) 早稲田大学図書館蔵明治十二年版本。「総論」。

(24) 東洋文庫蔵自筆稿本。

(25) 「佚存文字」は、筆者の造語。「佚存書」の語に倣う。

本来は中国製の漢字で、日本に伝わり、中国では散佚した死字・廃字、または地域文字・位相文字となり、權威を認められた現存字書に載らず、ほとんどあるいはまったく見られず使用されない文字を指す。これを、日本製漢字と処理することは本末顛倒なことである。上代・近世にとくに多く存するようである。これについては院政期頃以来、今日まで言及・研究があるが、まとめて別稿をなすつもりである。佚存文字の可能性の高い字は、中国での新字・地域文字を、意味の転化を経て借用、字体のみを借用、あるいはそのまま利用したものであるが、それらとは関係のない偶合も考えられる。実例は漢籍に残らないという性格が、廃漢字と異なる。『中国古典文献学』・『学研漢和大事典』(林述齋『佚存叢書』、『佚存書』)・『日本漢字學史』等参照。概して經書の字彙は字書にほとんど載るが、史・子・集部、他の俗文学等の字彙は漏れが多い。

(26) 一九七三年長沢規矩也氏編『唐話辭書類集』所収稿本影印本。

(27) 一九九〇年笹原「国字と位相——江戸時代以降の例に見る

「個人文字」の、「位相文字」、「狭義の国字」への展開——『国語学』163参照。「新在家文字」は、特殊でないものを含むが、位相文字(体系・字彙、特徴的とされた字・文字群)として位置付けられる。とくに江戸時代から特殊視する意識も存したことが注目される。

(28) 一九七八年西川寧氏編『日本書論集』所収享保二〇年版本影印本。

(29) 早稲田大学図書館蔵享和三年版本。

(30) ちなみに中国・韓国語学での呼称には、造語、説明的語句、日本での用語を括弧で括る等してそのまま利用する例がある。自国の「国字」の類については、「字喃」(ベトナム)・「韓國固有漢字」(韓国)等の使用例がある。

(31) 漢字は基礎的知識、背景を考慮するための参考とし、漢字の日本的諸用法らしきものは参考程度とし、国字と国字の用法とを中心に扱うこととする。

(32) 表記法と用字法との観点から国字の存在位置についての一例を示す。武具の「ウツポ」(音・片仮名)を例にとると、表記法では、国語義からの漢字表記は漢字の訓読による「空穂」、「靱」(異体字に「靱」等もある)、「藏」・「苜」(原型か、異体字の漢字体「菜」という国訓式もある)等国字(会意・仮名合字)のように関連付けられる。用字法からは、「藏」は、魚のウツポには仮借(宛て字)しないこと等が挙げられる。

印刷の都合により、一部引用原文の傍訓・符号を省き、字体系も活字体に近づけた。